

平成30年度 山口大学教育学部附属光小学校 学校評価書 (校長 野村 厚志)

1 学校教育目標	
教育目標	前期(1~4年次) 生活の中で、一人一人が気づき、考え、行動する 中期(5~7年次) 生活の中で、自己の言動を振り返り、深めてゆく (教育の基調) 真(知性)…自ら求めて学ぶ子 純粋に冷静に真理を追究して知性を養う子どもを育成する。 美(心情)…美しさのわかる子 美を愛する情操豊かな子どもを育成する。 健(健康)…希望に満ちた元気な子 健康ではつらつとした子どもを育成する。 労(勤労)…進んで働く子 積極的に自分の手足を動かし、額に汗して働く子どもを育成する。 善(善意)…仲良く親切な子 おおらかに善意に満ちた子どもを育成する。
中・長期目標	① 個に応じた指導方法の改善と学力の充実 ④ 小中一貫教育研究の推進と教員養成の充実 ② 実生活との関連を図った心の教育の推進 ⑤ 子どもと向き合う時間の確保に向けた業務改善の推進 ③ 家庭・地域とともに進める健康・安全と体力の向上

2 現状分析(前年度の評価と課題を踏まえて)	
(1) 学力の向上 全国学力・学習状況調査等の結果から学力は良好な状態にある。しかしながら、困り感を抱える児童がどの学年にも見られることから、個に応じた指導方法の工夫による学力の底上げが必要と考えられる。集団一個のバランスに配慮した授業づくりや学校全体での学力向上の具体的な手だての開発が求められる。	(4) 学部・保護者・地域との連携 特定の教科等において、学部教員との密接な連携が推進されているが、すべての教科領域について学部教員と連携した教育研究の推進のための方策が必要である。家庭との連携については、学校からの情報発信にある程度の満足は得られているが、広域の通学エリアによる保護者間のつながりの希薄さも否めない。学校-保護者ととも保護者-保護者のネットワークづくりを充実させていくことが求められる。地域との連携については、学校運営協議会準備組織の立ち上げが計画されており、附属学校の特性を生かした地域とともにある学校づくりが求められる。
(2) 心の教育の推進 多様な実態の児童を受容できる集団づくりがどの学年でも進められており、孤立感を感じる児童が少ない。そのような校内環境においても人間関係の固定化や学校外での正しい言動に課題が見られ、自律した規範意識の醸成が求められる。	(5) 業務改善 研究紀要の廃止、研究の進め方の工夫、月2回の一斉帰宅等、様々な取組が進められてきた。勤務環境の改善については、一層の工夫を進めるとともに、教職員個々の働き方に対する考え方の見直しが進むような取組の工夫が求められる。
(3) 元気創造 給食の残量は極めて少なく、食育指導の成果が見られるが、朝食摂取立の低さ等、本校の通学事情に応じた指導の工夫の必要が感じられる。体力面では、校内での骨折等のけがが多く、安全に配慮した運動能力の向上が課題である。	

3 本年度重点を置いてめざす成果・特色、取り組むべき課題	
○ 対話的な学びを通して、確かな思考力・判断力・表現力の育成を図る。(学力の向上)(元気創造)(学部連携)	
○ 多様な関わりを通して、自他を尊重できる温かな集団を醸成する。(心の教育の推進)	
○ 業務の見直しと効率化を進め、児童と向き合う時間の確保を図る。(業務改善)	
○ 附属学校の特性を生かした地域とともにある学校づくりを推進する。(保護者連携)(地域連携)	

4 自己評価					5 学校関係者評価		
評価領域	重点目標	課題解決に向けての取組(具体的方策)	評価基準	達成度	達成状況の診断・分析	取組状況に関する意見・要望等	評価
学力の向上	対話的な学びを通じた、確かな思考力・判断力・表現力の育成	○ 主体的・対話的で深い学びについての実践と情報発信 ○ 児童に育む資質・能力に特化したカリキュラム開発	児童アンケート(授業関連)の肯定的回答 4(90%以上), 3(85%以上), 2(80%以上), 1(80%未満)	3	授業関連の児童の肯定的回答は89%であった。授業が分かる95%、友達と話し合える94%に対し、積極的に発言できる78%が課題である。	主体的・対話的な学びの効果は上がっている。今後も子どもの学びに寄り添う授業を求める。	3.4
	各学年の課題に応じて、保護者と連携して取り組む学力向上策の開発	○ 各学年の課題に応じた家庭学習方法の開発 ○ 児童に育む資質・能力に応じた家庭学習方法の開発	保護者アンケート(家庭学習・学力)の肯定的回答 4(90%以上), 3(85%以上), 2(80%以上), 1(80%未満)	1	家庭学習の保護者アンケートの肯定的回答は73%であった。学校からの宿題については自ら取り組んでいる83%に対し、宿題以外への取り組みは63%と低い値となった。	家庭学習の捉えが個々に異なるため、具体的に示すことが必要。保護者の協力も不可欠。	2.4
心の教育の推進	多様な関わりを通して、自他を尊重できる温かな集団づくり	○ 道徳科の授業づくりを通じた、児童の変容の見取りと評価 ○ ファミリー活動を通じた異年齢集団での望ましい態度の育成	児童・保護者・教職員アンケート(道徳科)の肯定的回答 4(90%以上), 3(85%以上), 2(80%以上), 1(80%未満)	2	道徳科授業評価アンケートの肯定的回答は82%であった。「子どもにとって内容が難しすぎる」といった感想が見られたことから、授業づくりの一層の工夫が必要である。	道徳の教科としての取組はこれからの期待される。多様な考え方を認め合う雰囲気を目指す。	2.8
	一人でもよりよく判断し、実践しようとする心身の醸成	○ 登下校中や公共の場での態度の価値付けを通じた、よりよい道徳的判断力の育成	児童・保護者・教職員アンケート(規範)の肯定的回答 4(90%以上), 3(85%以上), 2(80%以上), 1(80%未満)	4	規範に関する児童・保護者・教職員アンケートの肯定的回答は93%であった。本校は公共交通機関を利用して通学する児童が多いため、今後も規範意識を高める指導を行いたい。	学校外の態度は学校イメージにもつながる。今後も場に合わせた行動ができるよう指導を望む。	3.6
元気創造	正しく判断し、自らの生活を工夫しようとする意欲・態度の育成	○ 早寝・早起き・朝ご飯の励行、食育指導や保健指導を通じた、健康的な生活習慣や態度の育成	児童・保護者アンケート(生活)の肯定的回答 4(90%以上), 3(85%以上), 2(80%以上), 1(80%未満)	1	早寝・早起きの児童・保護者アンケートの肯定的回答が77%、朝食を毎日食べえている児童は80%にとどまっている。健康的な生活習慣の啓発を児童・保護者に行っていきたい。	通学時間の関係で、望ましい生活習慣が困難かもしれないが、保護者の協力が欠かせない。啓発の工夫が求められる。	1.8
	安全に楽しく運動を楽しむ運動能力の向上	○ 運動場を捉えた具体的な安全指導の充実 ○ 体育科の授業や家庭生活での実践を通じた柔軟性の向上	校内・校外での骨折(前期比) 4(50%減), 3(40%減), 2(30%減), 1(20%減)	1	前期骨折は7件、後期は9件で増加となった。昨年度の怪我での保健室来室は1971件、本年度は2580件と大きく増加しており、運動場の擦過傷が最も多かった。	防げる安全は徹底すべき。また、子どもの筋力、柔軟性の向上が求められる。	1.6
学部・保護者・地域との連携	学部との連携を密にした教育研究の推進	○ 学部教員と連携した研究授業や授業公開、研修会の充実	教職員アンケート(学部連携)の肯定的回答 4(90%以上), 3(85%以上), 2(80%以上), 1(80%未満)	3	学部連携の教職員アンケートの肯定的回答は86%であった。研究大会や公開授業の指導案について検討段階から学部教員と情報交換を行い、一層の連携を図っていきたい。	学部連携は附属ならではの強みであるので、一層の強化を望む。また、今後も授業公開を期待する。	3.4
	学校-保護者、保護者-保護者のネットワークづくり	○ 学校webページを活用した各種情報発信の充実 ○ 非常変災等、学校の危機管理に関する共通理解と訓練の充実 ○ PTA、おやじの会への参加を通じた保護者同士の絆づくり	保護者アンケート(PTA等)の肯定的回答 4(90%以上), 3(85%以上), 2(80%以上), 1(80%未満)	2	学校の情報発信や非常変災時の対応、PTAに関する保護者アンケートの肯定的回答率は80%であった。特にPTA協力では72%と低いため、一層の参画に向け、PTAと連携していく必要がある。	校区が広いので、ネットワークづくりが困難である。非常変災時は、各地域の実態によって柔軟に対応することも必要。	2.2
	附属学校の特性を生かした地域とともにある学校づくり	○ 学校運営協議会準備委員会の設立と熟議による、コミュニティ・スクールの推進	4(附属の特性を生かした仕組の構築) 3(学校運営協議会の組織づくり) 2(学校運営協議会の人選) 1(準備委員会の設置)	3	学校運営協議会委員を保護者・地域有識者から幅広く人選し、2月25日に第1回学校運営協議会を実施することができた。	今後、コミュニティ・スクールのますますの発展を期待する。	3.2
業務改善	業務の見直しと効率化を通じた働き方の改善	○ 教職員個々の勤務実態の自覚と超過勤務時間減への意識付け ○ ポイントを絞った会議や指導案検討の工夫を通じた業務の効率化	○ 平均超勤時間の4月比 4(30%減), 3(25%減), 2(20%減), 1(15%減)	4	出勤、退勤時刻を7-21時、7-20時と段階的に行い、4月の平均超勤時間を前年度比で30%以上削減することができた。	附属校において大きな課題であるが、少しずつ努力の成果が実りつつある。一律ではなく個に応じた改善策も必要。	3.6

6 学校評価の総括(取組の成果・次年度への改善策)	
<ul style="list-style-type: none"> <li>学力については、概ね良好な状況にある。教科間の差が見られることから、底上げを含めたバランスのよい学力の向上について、取組を改善していく必要がある。</li> <li>心の教育については、児童・保護者・教職員の評価に差が生じている。児童の高い自己肯定感を大切にしつつ、幅広い価値観を身に付けられるよう、道徳科を要としながら、道徳教育の全体計画の見直しを含め、取組の改善が必要である。</li> <li>学年が上がる毎に起床や就寝に課題が見られ、朝食摂取率については、毎日摂っている児童が8割にとどまっている。通学が広範囲にわたる附属学校の実情に即した提案が必要と考える。また、校内での骨折が依然多く、柔軟性の向上に課題がある。SNS等、インターネットの利用についても、家庭と連携した取組が必要である。望ましい生活習慣の形成に向け、児童への指導の改善、家庭との連携に重点を置いて取組を進めていく必要がある。</li> <li>学部との連携については、学校からのニーズと学部のリソースとのマッチングに改善の余地が見られる。附属学校の取組について、年間を通じた定期的な情報提供サイクルの構築を図っていく必要がある。地域連携については、学校運営協議会の立ち上げが終わり、コミュニティ・スクールとしての歩みが始まった。学校運営・地域連携・地域貢献について、具体的な取組への挑戦が課題となる。学校課題の共有等、附属学校の特性を生かした取組の充実を図っていきたい。</li> <li>業務改善については、時間短縮の面では一定の成果が見られる。今後は、限られた時間の中で可能な限りの業務の質の維持・向上が図れるよう、一つ一つの業務の意味や必要性について見直しを進め、新しい附属学校での働き方モデルの構築を目指していきたい。</li> </ul>	